

位置と環境

遺跡は、東市来町の中心部から約1km、標高約180mの遠見番山の南東の裾野標高約40mの台地上に位置する。本遺跡からは、南西に伊作田城跡、東に鶴丸城跡などいくつかの中世山城を望むことができる。また、北側の一段高い台地上には、今里遺跡・市ノ原遺跡などが存在している。

調査の経緯

南九州西回り自動車道建設に伴って、県教育委員会が平成8年に確認調査、平成9・10年に本調査(約10,000m²)を実施した。

遺構と遺物

向栢城跡は、中世の山城として知られていたが、発掘調査の結果、旧石器時代のナイフ形石器文化期・細石刃文化期、縄文時代草創期・後期・晩期、古墳時代、古代(奈良・平安時代)、中世(鎌倉・室町時代)や江戸時代に綿る数多くの遺構・遺物が発見され、長い時代にわたる複合遺跡であることが判明した。

なかでも、縄文時代草創期の包含層からは、大量の隆帯文土器と、石鏃(矢じり)等が出土した。特に、石鏃(矢じり)の出土は80数本にも及んだ。

また、写真2のように、長径約1m・短径約50cmで、周辺に板石を配した配石遺構も検出されている。この遺構は、舟形配石遺跡とも呼ばれ加世田市、川辺町や志布志町などの縄文時代草創期の遺跡からも発見されているものである。

このように、数多くの石鏃や特徴的な遺構が発見されたことは、縄文時代の夜明けと呼ばれるこの時代において、この地で豊かな生活が営まれていたあかしであると言える。

特徴

数多くの石鏃の出土は、南九州における縄文時代の狩猟具の変遷や当時の環境を知る上で貴重な資料である。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保



第1図 向栢城跡の位置 5万の1

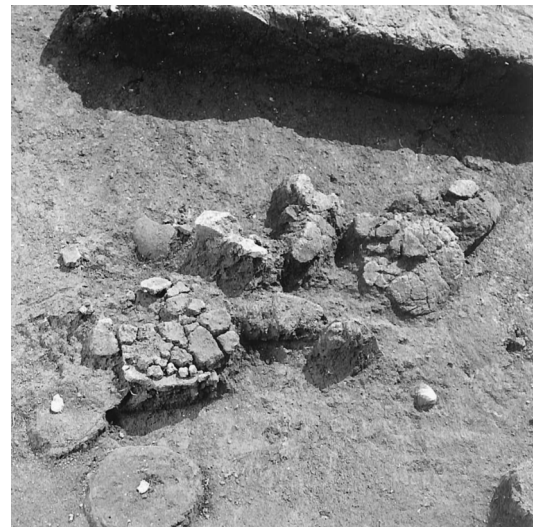


写真1 土器の出土状況

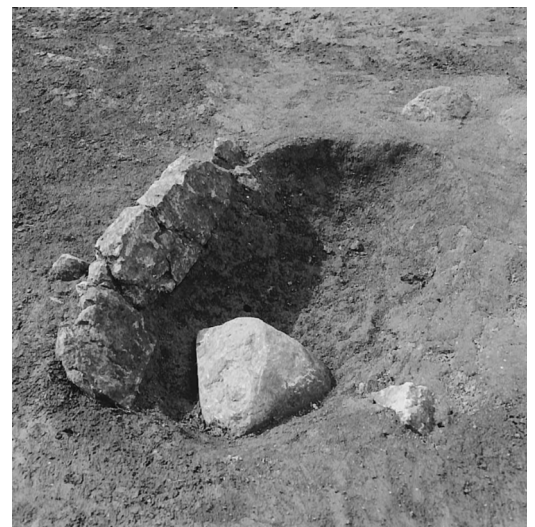


写真2 配石遺構

管されている。

(鶴田静彦)